夫は、先代大隅大夫にさ程の遜色はない、との事である。そして、大隅は、その古老の知る範圍の最高の大夫であつたさうである。これは、古靱大夫の技藝を最も高く評價した一例と思ふ。

次に、私は嘗て某老大家に、「あなたの知つてゐる範圍の大夫で、古靱大夫は何番目に上手か」と糺したに對し、するとその老大家の返答では、古靱大夫は五指の中に屈せられてゐた。即はち、古靱大夫の上に位する大夫は、三代目竹本大隅大夫、四代目竹本住大夫、竹本摂津大掾、六代目竹本組大夫の四人であつた。この席順は大分公平で、眞實的であると思ふ。

第三に、また嘗て私は在東京の大人に、「三代目越路大夫と、古靱大夫とはどちらが上か」と問ひ正したに對し、その大人は「それは難問じや」と答へた。これは前記の二つに比較すると、古靱大夫の一番低く評價したものであるが、以上の三つを綜合すると、古靱大夫の價値は、少くとも三代目越路大夫に優るとも劣らずといふ結論に到達する。

かくの如き藝術的價値を有する古靱大夫の櫓下襲任に際して、彼に對する希望は、餘りにも多過ぎて、その總てを記し盡せないが、その中最も重要で、且急を要するものとして、本格的義大夫節の保存を目標とする現在文樂座藝人の技藝の向上に關する櫓下大夫の積極的行動を促進する。即はち、その具體案の一として、文樂座の總稽古に際し、櫓下古靱大夫は、開演から終演に到るまで、總ての役場を、最も効果的なる席に座して聽き、これに忌憚なき批評と積極的な指導を與へることを斷じて强要する。

○

武智鐵二

新紋下に對して希望する處は、彼の行政的手腕に求むる處である。然るに彼の行政的手腕は全く未知數であり、結局彼がその方面の素人であることを推測させる、いはゞ惡材料が手許にあるのみだ。然し彼がその方面に關して素人であるといふのは、あたらずさはらずの圓滿な行政的見地から言へることで、この世界の宿弊打破のためには、素人の荒療治が誠に肝要なのである。

第一に會社に對しては、古典の嚴肅性を說いて、また幾多の先人興行師の財的破綻の犧牲の下に於てのみ、眞の古典としての斯藝が輝いた歷史を說いて、古典に據つて金を儲けることによつて、古典を傷けるユダヤ的思想を放棄せしむべきである。その根本的な會社側の理念の變更の上に立つて、上演曲目への積極的干涉、出演大夫三絃への藝術的指導並びに

要望をなすべきである。

第二に内部的には、私情を捨てゝ藝道の爲に力を致すべきである。私情を捨てゝといふのは、織大夫の如き實力のある大夫は、たとひ自分の弟子であるからとて、遠慮せずに登用すべく、然らざるものは、顔や友交關係に拘らず、退けて用ひざるを言ふのである。

第三には、若い大夫の藝術上の待遇問題である。十年程前までは、大序を大勢の大夫が分擔して語つてゐたが、あの制度を復活し、併せて新人の登用をして欲しい、その爲には本興行の開幕三時間前から、大夫三絃人形の若手の人達による練習的無料興行を行ひ、當日の本興行入場券所有者を招待して見せて貰ひたい。その演し物に本興行の立狂言の大序序切二段目等を見せて貰へれば、こちらも嬉しい。

第四に、これは會社も儲かることだから、是非實行して欲しい。それは大夫の名前替である。由緒ある大夫の名前は、それが斯道修行の目標となつてゐるだけに、他の藝部門の名前とは違つて、それをつぐ大夫の責任は誠に重大で、未熟な大夫が立派な名前をつぐことが、斯道墮落の原因となり得るのである。既に先の染大夫は古來由緒ある染大夫を泥土に委したが、今日の〇大夫、×大夫もその例に洩れぬ。又、由緒深い名ではないにしても、〇〇大夫□大夫等も、名人上手の仕上げた名前を毀すものである。又、そんな偉い名前の大夫に對しては、紋下も指導の方法がないだらうと思ふ。そこでそれらの名前を一級づゝ下げて貰ひたい。これは突飛なやうだが、先例があるから希望するのだ。即ち今の呂大夫は由緒ある島大夫を返上して、呂大夫に變更したのだ。呂大夫の藝には感心したことのない私も、この心掛には心から感服してゐる。會社としては、名前が上らうが下らうが、襲名改名で團體が出來て、お客が來て、お金が儲かればそれでよいのだから、これは最も實現の可能性の在る要求だと思ふ。

一六・一二

○

吉永孝雄

豐竹古靱大夫の文樂櫓下襲名は、その實力から言つてもかつぷくから言つても、年齢から言つても當然なるべき人がなつたと言へる否、何れかと言へば遲きにすぎた感じがする。實に堂々たる貫祿の、何等の不安を與へぬ櫓下である。そして義大夫愛好家の待ちに待つて居るその披露興行が新春一月に華々しく行はれる。一體何を出すであらうか。「引窓」か「寺小屋」か、「野崎村」か、「日向島」か、それとも「熊谷陣屋」かと愛好家は色々と自分勝手な想像をほしいまゝにして暫し樂しい一時を過ごした事であらう。